

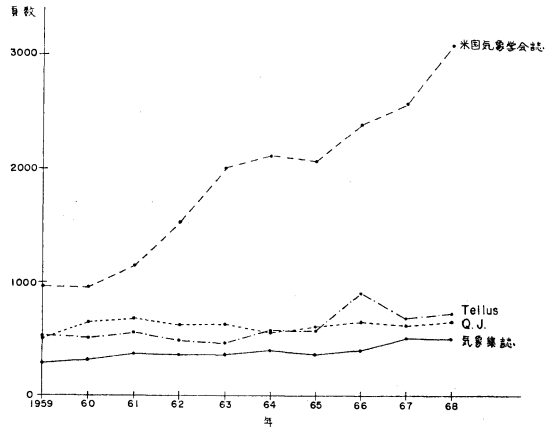
卷 頭 言

理事長 山 本 義 一

気象集誌の質的量的充実を図ってわが国の気象学界の国際的地位を向上させたいということを昨年の巻頭言の中に書いた。これに関連して、気象集誌の研究専門誌としての地位は国際的な同種の雑誌と比較したらどの程度であるかを調べて見たい。その際一番本質的なことは論文の質にあるが、気象学の広範な分野に亘る論文の質についての議論は到底筆者のなしうる処ではないので、この点にはここでは触れないことにして、二三の研究専門誌の量的な面の比較を試みた。とりあげた雑誌は米国気象学会誌、Q. J., Tellus と気象集誌とであり、過去10か年(1959年より1968年まで)の1年毎の総頁数を比較してみた。その場合に各雑誌により1頁内に収録される字数が異なるので、気象集誌1頁の字数を基準にして、他の雑誌と同じ1頁字数に換算した頁数を用いた。また米国気象学会誌は1962年以降は J. Atm. Sci. と J. Appl. Met. に分かれているので両者の頁数の合計を用いた。その結果は図の如くである。

この図を見て先づ気がつくことは過去10年間における米国気象学会誌の目覚ましい発展である。これにくらべると Q. J., Tellus, 集誌の発展は微々たるものとしか受取られない。この米国の独走体制は恐らく宇宙開発の一環としての気象衛星観測の実施が大きな素因となっており、そのための NASA, ESSA における気象研究体制の充実とそれに促されて、多くの大学において気象学講座が新設されることによって、気象の研究者が急速に増加していることが原因であることは想像に難くない。図に示された米国の気象研究の量的増加は10年間に約3.2倍の成長率であるが、この傾向がまだ将来に亘って衰えぬかどうか興味のある事である。手元にソ連の雑誌がなく、その状況を比較することが出来ないのは残念であるが、米国の急速な発展がその気象衛星観測に由来しているとするならば、多分同じ理由でソ連の気象研究が活発を呈していることも想像に難くない。

Q. J., Tellus, 集誌についてみると殆んど平行しているようであるが、仔細に調べるならば、10年間の増加は Q. J. が1.33倍、Tellus が1.43倍、集誌が1.76倍となっており、集誌の伸び率が若干大きい。なお昨年の巻頭言で述べたようにわが気象学会では賛助会員の増加をはか



り集誌、天気を増頁をはかりたいと考えているので、少くとも次の10年間の間には集誌が Q. J. や Tellus を抜くことは充分期待しうる処である。

それにしてもわが国の生産力は西独を抜いて、米ソに次いで世界3位にのしり、年毎の増加率も数パーセントであるというのに比較すると、気象学の研究面におけるわが国の進歩は何と遅々としていることであろう。これについてはわれわれの努力の足りないこともあるが、基本的には政府の気象事業(研究・教育面も含めて)全般の未来社会における重要性に対する認識の足りなさによるものと思うのである。

文化の発展、生産の増加に伴って気象の重要性は急速に増大しつつあるが、その役割は一部の積極的な面を除くと、現在においては未だ多くは災害防止とか公害防止とか消極的な面であって、当然それは政府の国民に対するサービスとしてなされなければならぬ面が多いのである。米国の気象局が数年前改組拡大されて名前を環境科学奉仕庁と改めたことは、米国の政府がこの面においてわが国の政府よりもはるかに進んだ認識をもっていることを物語っている。このことは反面われわれ気象事業(研究・教育面も含めて)にたづさわっているものが、その事業の重要性を国民一般にPRする努力が足りなかったことをも意味しており、われわれはこの面を真剣に考慮すべきであると考えらるものである。